



ふれあい活カゆとり

すみだ



隅田川筏渡ノ図 歌川国芳

(「吾妻鏡」にある源頼朝が平氏との合戦のため隅田川を渡る故事にちなんで製作されたもの。すみだ郷土文化資料館 所蔵)

墨田区の誕生から、いまをたどる②

すみだが歩んだ歴史

古代のすみだ
人類の歴史が始まった紀元前6000年ごろは、すみだはまだ海の底でした。
しかし、長い年月をかけて東京湾北に入江がひきはじめ、さらに秩父連峰、三国山脈、日光

連山などを水源とする数条の河川によって運ばれた土砂が、その河口に堆積して、土地が生まれました。これが現在の墨田区の基盤になったのです。
両国国技館出土の壺は、古墳時代の完形の遺物であり、出土

地周辺の陸地化を推測させます。
中古・中世のすみだ
9世紀ごろになると、前に述べた河川の流路もほぼ定まり、その一つが「すみだ川」と呼ばれるようになりました。

平安時代に入ると北部区域は、宿駅として武蔵国・下総国間の重要な経過地となっていたことは、ほぼ確実です。また、現在の向島付近は島形をなし、牛放の地であったと考えられています。北部区域の街道は、下総

国の国府(現在の市川市)に通じていたと推定されています。
平安時代の古典「伊勢物語」にある有名な故事のくだりで「すみだ川」の名が記され、船の上の在原業平が、「名にしおはば、いざこと問はむ都鳥」と詠んだとされています。

このころには、既にこの区域内

には、寺島、牛島、柳島、浮洲といわれた吾婦の森などの島々が形成されていました。

北部区域は農村としての営みを続け、源頼朝が平氏に対して拳兵した治承4年(1180)ころは、東国武士の名門である葛西氏所領となっていました。

室町時代に成立した物語「義経記」においても、牛島や墨田の地名が記され、源頼朝(1147~99)が下総国から武蔵国方面に抜けるために、すみだを経たことが描かれています。

また、「吾妻鏡」によれば、頼朝の軍勢が「隅田宿」に着いたとあります。

その後、戦乱に巻き込まれながらも、16世紀に小田原の北条氏が勢力を得ると、その家臣の領地として開発が進み、農村地帯として発展しました。

お相撲さんの世界に1日入門

8月2日、両国の国技館内にある相撲教習所で、教育委員会主催の子どもすみだ博士セミナー「お相撲さんの世界に1日入門」を実施しました。区内の子どもたちと保護者約40名が参加し、大相撲の歴史や文化などを学んだ後、力士の稽古のし方などを見学、その後皆で相撲健康体操をして体をほぐしました。



